

「宿題はちゃんと進んでるの？」

トムヤムクンの真っ赤なスープをずっと口に流し込みながら、目の前に座った母親が顔を上げずにそう訊いてきた。夏休み真っ只中のその日、正午を少し過ぎたばかりのフードコートは家族連れでごった返し、嫌にガヤついていた。

「別に」

ちゃんぼんの麺の上にこんもり盛られた野菜の山を箸でつつつきながら、僕はそっけなくそう返した。親とイオンに来ているというだけですでに気が滅入りそうなのに、あれこれ聞かれるのは不愉快極まりない。

「別ってあんたねえ……。少しは会話を提供しなさいよ。」

気難しい中学生の息子の態度を、母は呆れ顔で嗜めた。テーブルにはどんよりとした空気が重くのしかかっている、僕は今すぐにその場から駆け出したかった。

* * *

ふいに、聞き覚えのある声が耳に届いた。反射的に視線を向けると、同じくラスの水上さんがトレーを手に歩いてくる。ドクン、と心臓が跳ねる音がした。水泳部のエースで、いつも友達に囲まれて楽しそうに笑っている水上さん。すれ違うとやわらかい夏の日差しが匂いにする水上さん。おそらく友達と遊びに来ているのだろう、水上さんは数人の女子たちと楽しげに談笑しながら歩いていた。

気づけば、目が離せなくなっていた。ぴったりした白いTシャツの上にとつた薄いベージュ色のカーディガンが羽衣のようにヒラヒラと揺れ、デニムのショートパンツから伸びた白くすらつとした足は昼の明るさの中で眩しいほどに浮かび上がっていた。足元の黒く艶やかに光るサンダルの、わずかなヒールの傾きが、彼女を大人びて見せている。

瞬間、自分が急に幼くなったように感じられた。私服姿の水上さんは僕なんかとは段違いに洗練されていて、家族とイオンに来ている自分が情けなくて仕方なかった。

どうか見つかりませんように——僕は祈りながら顔を落として、ちゃんぼんを啜った。熱い麺が口に入るたび舌がヒリついたが、構わず口へ運び続けた。

「どうしたの急に。」

母親は息子の様子に困惑しているようだった。僕はそんな母親が憎くてたまらなかつた。どうか今だけは黙っていてくれ。他人のふりをしてくれと、そう心の中でつぶやいた。

水上さんはそんな僕の心などお構いなしにずんずんとこちらへ進んできた。心臓の音は今や脳みそを揺らすほどであった。やがて水上さんは僕のそばまでやってきた。その瞬間、優しい香りがふわつと僕の鼻腔を掠めた。

「ここら辺席空いてないねー」

水上さんが友達に向かってそう言うのが聞こえる。

箸を握る手に嫌でも力が入るのがわかった。見つかつて欲しくないと願いながらも、僕の五感には彼女の一拳手一投足を逃すまいとしている。

しかし、いや当然のことではあるのだが、僕の心配は杞憂に終わった。水上さんは僕に気づくことなく、彼女たちの足音はやがて喧騒に紛れて消えていった。

さっきまで吹き抜けた夏のそよ風のような軽やかさは跡形もなく消えていて、僕と母親の間には再びどんよりとした空気が漂い始めた。僕は、自分が情けなく仕方がなかった。